

---

# 全入時代と山口大学の取り組み

丸 本 卓 哉

---

## 1. はじめに

大学・短大の学生収容力が、進学希望者の数を上回るという「全入時代」が2007年度には来るだろうと予測されているが、それによってどういう問題が生じるのか、実際には全入時代に突入してみないと本当のところは分からない。

しかしながら、山口大学では、教養部を改組した後、教養教育や共通教育の実態が少しずつ形骸化するのに加え、入学してくる学生の多様化に伴う学生意識の変化や高等学校側の大学入試に取り組む姿勢の変化、つまり、受験科目のみを重点的に教育することなどによって、高校在学中に本来勉強していなくてはならない授業科目の履修が十分でないことによる学力低下などが、1998年（平成10年）頃から顕在化するようになった。この傾向は大学進学率の上昇と入学試験の多様化によるところが大きいと考えられるが「大学全入時代」の到来によって、さらにこの傾向が強まるものと思われる。

勉学意欲に満ちた高校生が自分の能力に応じて希望する大学や短大に進学できるの

は良いことであるが、問題がないわけではない。2004年度以降、国立大学では法人化と評価への対策で手一杯のところに加え、財政上の問題で大学経営の危機にもみまわれようとしている厳しい状況のなか、学生の学力や質の低下にも対応しなければならない状態に陥っている。

山口大学では、2000年頃から現在のような状況が生じることを予想し、いくつかの対策を取ってきたところである。これらの対策の成果について、評価をするには、まだ時間的に不十分であり、毎年のように改善やバージョンアップを進めている状況にあるが、いくつかの取り組みを紹介してみたい。

## 2. 学生生活を総合的に支援する大学教育機構の設置

学力低下を含む多様な学生の大学生活を的確に把握し支援するには、入学試験から卒業・就職まで総合的にマネージする組織が必要で、従来バラバラに運営していた学生関連の各組織をまとめ、機能的に運営できる大学教育機構を2001年に設置した。

大学教育機構は、

- ①大学教育センター：共通教育、学部専門教育、大学院教育に関するカリキュラム、授業担当、単位認定等に関する業務を行う
- ②アドミッションセンター：各種の入試に関する業務を行う
- ③国際センター：留学生、国際交流、国際協力等に関する業務を取り扱う
- ④学生支援センター：学生生活および課外活動の支援、学生相談および就職の支援に関する業務を取り扱う
- ⑤保健管理センター：健康管理およびメンタルヘルスに関する相談に対する業務を取り扱う
- ⑥エクステンションセンター：学内外における正規の授業以外の教育活動に関する業務を取り扱う

の6センターから成っている。

大学教育機構は、学生生活全般にわたって総合的にケア出来るシステムとなっており、以前より学生の悩みや課題に効果的に対応できるようになってきたと感じている。同機構には専任教員24名を配置しているが、それぞれのセンター業務に精通した専門家を配置しているのが特徴である。教員としての職務以外に各センターの専門的業務を果たすというセミプロ集団である。ただ、大学教育機構の在り方についても、これで十分というわけではなく、PDCA（企画－実施－評価－改善）サイクルに沿って、毎年改善を余儀なくされている。次の章から、6センターの活動の中で、学生の質の低下に対応する2、3の取り組みについて紹介してみたい。

### 3. 弾力的な入試政策と広報活動

多様化する学生意識の変化に対し、大学の教育・研究内容や人材育成の基本方針を受験生や保護者、あるいは高校や予備校などに正しく伝えることが出来ているかどうかは、今後の大学運営に極めて大きな影響を及ぼす。法人化後、大学間競争が激しくなる一方、少子化で受験生はどんどん減少している。受験生にとって魅力ある大学にならなければ学生定員が充足できなくなる日が間近に迫っていると考えられる。

学生にとって魅力ある大学とはどんな大学であろうか。一言では言い表せないが、教養教育を含む専門教育をきっちりとするのは当然のこととして、①卒業や修了時に、社会に出ても十分に対応できる能力や課題探求力を持った人間力豊かな人材育成が出来る大学、②学生生活を満足に過ごせる環境や学生支援体制を持ち、実施できる大学、③学生のメンタルヘルスや就職相談に適切に対応でき、就職率の高い大学、の3つが重要であると考えられる。現実には、これらに関する実績をしっかりと積み重ね、社会の評価と認知をもらうことである。

山口大学では、数年前から県内外の高校や地域に対する説明会を積極的に進めている。大都会での説明会を単独で実施すれば経費が高くつくため、数大学合同の説明会も開催している。来年度からは他の都市でも地方試験場を開設することとしている。また、AO入試の充実や地域卒の導入など多様な選抜方法を実施し、地方都市の持つ安全性や勉学環境などの良さを広報しながら、志願者増の努力を続けている。

#### 4. 学生の能力を引き出す教育(共育)

多様な学力を持つ学生に対しては、能力に応じたカリキュラムを設定し、目標を持たせて勉学させることが重要である。山口大学では、理系基礎科目の学力が低い学生には、入門科目等を設定して学力の充実に図るとともに、優秀な学生には授業料免除などの特待生制度を導入して、勉学を奨励している。また、基礎的な実力を備えた人材を輩出するために、アドミッション・ポリシーとグラデュエーション・ポリシーを結ぶ一貫した学士課程教育の効率的なカリキュラム編成と日常的なPDCAサイクルを動かしている。

さらに、学生の自主的な企画・実践力を養うために実施している「おもしろプロジェクト」(学生が自主的に企画・立案・実施・成果報告を全て行うプロジェクトで、1プロジェクト20～60万円の経費で実施。2005年度に文部科学省の教育改善GPに採択されている。)も11年目を迎え、課題探求能力を備えた人材育成教育(共育)を実施し、成果があがっている。

#### 5. 学生支援の充実した大学づくり

学生が目標と目的意識を持って勉学に励み、充実した学生生活を送るためには、教育環境の整備と教員・職員・学生の3者が一体となった大学づくりが必要不可欠である。初等・中等教育における教師から学生への一方通行的な教育ではなく、山口大学ではお互いに刺激し合いながら成長していく「教育=共育」を目標に教育改善と意識改革を進めている。

学生支援の大事な柱である、①勉学やメンタルなど各種の相談に対応する学生相談部、②課外活動や生活を支援する学生生活支援部、③就職相談および就職活動を支援する就職支援部、からなる学生支援センターを2003年に設置した。センターには専任教員2名、兼任教員3名および非常勤カウンセラー2名を配置し、年間6,000件を超える各種の学生相談と支援を実施している。学生からの評価も高く、学生のキャリアデザインの成果も挙がってきている。

#### 6. おわりに

山口大学では、教職員・学生共に力を合わせて魅力ある教育と個性豊かな大学づくりを進めているが、全てにうまくいっているわけではなく、新しい企画を実施しようとするたびに、各種の課題にぶつかって苦労しているのが現状である。しかし、誠心誠意、ねばり強く議論し、説得すれば必ず関係者の理解が進むと信じているが、今後、改善しなければならない課題も数多く残されている。

ここで紹介した山口大学での取り組みは、既に多くの大学で実施されていることも多いと思われる。また、大学によってその規模や設置基準が異なるため、大学間の状況が大きく異なっており一律に論じることは出来ないが、全入時代を迎えた今、これに対する取り組みの基本方針は大学間でそれほど大きくは変わらないものと思われる。本学の取り組みが少しでも他大学の参考になれば幸甚である。

(山口大学長/土壤生化学)